

クライアントの変容を促す医療ソーシャルワーカーの働きの研究

- 生活アセスメント形式を援用した枠組みを用いて -

日本福祉大学大学院 高柳 雅仁 (7857)

キーワード：ソーシャルワーク実践、ソーシャルワーク理論、ソーシャルワーク過程

1. 研究目的

医療ソーシャルワーカーとして働いていると、今まで受け身だったクライアントが問題を自分のこととして受け止め、自ら問題解決に向けて動き出そうとするときがある(以下、クライアントの変容とする)。しかし、この様なクライアントの変容がいついかなる時に、どのような働きかけによってなされるのかは明確ではない。この「クライアントの変容」をどのように分析すればよいのかについては、本学会第58回秋季大会で発表を行った。今回は、この方法を用いた事例の分析を行った結果、見いだされた特質について、改めて、研究方法についても言及しながら発表を行っていききたい。

2. 研究の視点および方法

ソーシャルワーク実践モデル等の先行研究を概観すると、実践からモデルや理論に至る研究の蓄積には更なる研究の累積が求められている現状にあることが見いだされた。今回、この研究の累積の一助となることを目指して事例から読み取れる共通の特質を導き出すことに挑んでいくことを考えた。この視点を満たす方法の検討を次のように行った。

はじめに、シングルシステムデザインやグランデッド・セオリー・アプローチ、KJ法やグループフォーカスインタビュー等の様々な質的研究方法を検討し、「クライアントの変容」が把握できるかどうか確認した。しかし、適切な結果を得ることは困難であり、新たな分析方法の検討が必要と感じた。すなわち、シングルシステムデザインにおいては、ある変容を促すと考えられる実践方法を適用した結果とそうでない結果を比較することによってでは、多岐にわたると考えられる変容を促す実践方法を推し量っていくことは困難であった。また、クランデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて医療ソーシャルワーカーの語りを分析し、そこにみられる特質を構造化したとしてもそれはソーシャルワーカーの独り善がりである。KJ法やグループフォーカスインタビューでもワーカーの独り善がりではない客観的なデータであるとは言い難い。その結果、大野らの生活アセスメントの形式を援用した枠組みを用い、「クライアントの変容」の読み取れる事例について、事例分析を行うことにした。具体的には、この事例の援助経過とソーシャルワーカーの援助方法、その根拠を詳しく記述し、援助経過を示す枠を作成した。さらに、クライアントへのインタビューを半構造化形式にて行い、その内容を逐語録化して、そこで語られた内容を分析し、先の援助経過枠に当てはめていき、クライアントから見たソーシャルワーカーの援助と照らし合わせることにした。併せて、ソーシャルワーカーの援助結果の評価については客観性を担保するために、この事例にかかわった他スタッフからの視点も半構造化インタビューにより意見を伺い、データの収集を行うことにした。そのうえで、「クライアントの

変容」を促すソーシャルワーカーの働きかけについて、何らかの根拠が明らかになれば、その部分をもとに実践から見られるクライアントの変容を促す共通の働きを探ってみた。

3. 倫理的配慮

インタビューに際し、調査対象者に研究概要説明書を用意し、これをもって説明を行い、署名による被面接者の同意を得た。また、インタビューや相談記録から得られたデータは個人の特定がされない形式に改め、データは研究のためだけに使用し、データの管理は筆者以外の者が閲覧できないよう、常に厳重に管理を行っている。

4. 研究結果

あらわされたソーシャルワーカーの判断とその根拠、クライアントの思い、スタッフの印象や考えが経過枠の中において一致をみる地点がある。この点がクライアントの変容を読み取れるところであると発表した。今回、この支援経過枠の分析を行い、ソーシャル昨年、第58回秋季大会において、生活アセスメントの手法を準用した相談経過枠をつくり、そこにワーカー、クライアント、スタッフのそれぞれの視点から「クライアントの変容」とそれを促すソーシャルワーカーの働きかけを明らかにした。その結果見出されたものは、「心身の安心」「人とのコミュニケーション」「大切な人との関係」「自己選択できる自信」と表現される4つの回復から成る支援の構造であった。「心身の安心」とは、身体的、精神的な安心、安定を保障された状態、人の生命にかかわる基本的な欲求の充足、安定と捉えることができる。「人とのコミュニケーション」とは、他者との交流、コミュニケーションを再開し、自分の現状を把握しなおす過程である。自分がおかれた環境の理解を助ける関係の確保、社会関係の再構築である。「大切な人との関係」とは、先のコミュニケーションの回復によって得られた社会関係の中で特に自分を支えて励ましてくれる人の存在である。「自己選択できる自信」とは、生活をしていく中で解決していかなければならない問題の解決方法を自分自身で選び取り解決に向かう場合や、生活の質を向上させていくための方法を自分で選んでいく場合等が考えられる。自分で責任をもって生きる道を選びとっていけるという自己の回復は、自己実現に向かう第一歩ということが出来る。

この結果の検証のため、医療ソーシャルワーカーへのインタビューによる事例分析を行った。ここにおいても、他のクライアントの変容が見られた事例について確かにこの4つの回復は見出すことが出来た。ただし、この研究においてはクライアント本人や他のスタッフのインタビューが行えておらず、先の事例研究ほどの客観性が得られていないという限界がある。今後は本研究の結果に基づき、クライアントの評価を適切に把握できる方法の開発、またクライアントの変容を捉えた4つの回復の信頼性、妥当性を更に検討していくことが課題である。

<参考文献>・木下康仁編著(2008)「分野別実践編グランデット・セオリー・アプローチ」弘文堂・平山尚、武田文、藤井美和著(2002)「ソーシャルワーク実践の評価方法 シングル・システム・デザインによる理論と技術」中央法規・大野勇夫、川上昌子、牧洋子編(2009)「福祉・介護に求められる生活アセスメント」中央法規